

1702年の今日、赤穂浪士が吉良邸に討ち入った。旧暦12月14日(現行暦では1月30日に当たる)であるから、ほぼ満月の日であった。立春前の寒中である。温暖化している現在でもやはり寒い、江戸時代であるから、さぞ寒い日であったろう。

まだ割りと暖かかった昨年12月14日、中日新聞夕刊第一面下のコラムに、「きょう、十四日は赤穂浪士が・吉良邸に討ち入った日。もちろん旧暦である。一七〇二(元禄十五)年、年の瀬は寒かったという」とあった。「もちろん旧暦」とあるにもかかわらず、現行暦の日付と旧暦の日付を混同している。今日のコラムにこそ、取り上げられるべき話題であった。

子供の頃、中田島砂丘に日の出を見に行った。初詣よりも心にしみる行事だった。日の出はいつでも感動的だが、1年に1度ということならば、冬至の日の出である。冬至を境に、地球に降り注ぐ太陽のエネルギーは増加に転じるわけである。これを一陽来復と言う。クリスマスも冬至祭に関係していると聞く。

冬至を過ぎて地上は次第に明るくなって来るが、温まってくるのはまだ先である。冷え切った大地(海も)が、温まる地上の足を引っ張る。二十四節気で冬至に続く、小寒、大寒の時期が最も寒くなる。そして立春、地上は確実に温まり始める。春の始まりである。春の気は発生・上昇の気。芽生えの時期である。旧暦では冬至を含む月が11月で、立春はだいたい1月に含まれ、1年は春から始まる。年賀状に「賀春」とか「新春」と書くのは旧暦のなごりである。新暦を取り入れていても、旧暦で新春を祝う中国の人々は聡明であると思う。

正月7日、春の七草を粥にして食べる。発生・上昇の気を頂くわけである。現行暦の7日では早過ぎるにもかかわらず、現行暦の日付と旧暦の日付を混同して、今年も世間では既に七草粥は食べられていた。今年、私は2月15日に七草粥を食べる。

3月3日の桃の節句(雛祭)も、7月7日の七夕(星祭)も旧暦日付でやらないで新暦日付でやっているから、桃の花が咲かない時期の桃の節句となり、梅雨時の七夕となってしまっている。

旧暦は太陰太陽暦である。月の運行に合わせて日付が決まる。新月が1日、満月が15日頃で

1ヶ月が29日あるいは30日になっている。1年は通常12ヶ月、そのままだと太陽の運行と1年が次第にずれて来るので、時々閏月を入れて調整し、その年は13ヶ月になる。

現行暦は太陽暦で、太陽の運行に合わせているが、月の運行にはまったく関係がない。最も正確な太陽暦は二十四節気(冬至・小寒・大寒・立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬...)である。太陽の運行の明確な刻みが基準になっている。

人間の営みにとって、太陽や月の存在は大きい。太陽は言わずもがなだが、月も見える形の変化が印象に残るだけではない。月の運行が潮の変化を生んでいて、それは当然、人を含めた生物にも影響しているということである。当に女性には生理周期という形で刻まれている。気象現象には潮流が大きく関わっているわけで、太陽の運行による大きな季節変化に、月の運行が多様性を加えていると考えられる。

暦を旧暦に戻すべきだと言うのではない。日常の日付はグローバルスタンダードの現行暦を使っても、常に旧暦を意識するような文化にしていけばいいと思う。旧暦には月の運行と共に伝統行事が刻まれているからである。桃の節句や七夕は当然、旧暦日付で行われるべきである。自然と共生してきた文化の伝統行事がズレて行われるのは、自然と人間との更なる解離に加担することである。

昨年7月の中日新聞には、冬の新月に伐採した木は良質であるという話題が載っていた。『月の魔力』には、満月や新月の日前後に殺人事件が多く、出産が多いという事が載っている。太陽との関連は木の芽時の病気など、既に意識化されているものが多いと思う。

人為的で自然に結びつかない六曜(大安、仏滅...)や現行暦日付の数字を気にする愚をやめて、二十四節気と旧暦を気にする。そうすると生理現象や自然現象、社会現象と、太陽や月との関連が更に発見され、人が自然の一部であるということが知識ではなく、当然のものとして受け入れられるようになるだろう。

(2005年小寒の頃、旧暦2004年12月14日)

参考:『月の魔力』(ALリーパー)、『旧暦と暮らす』(松村賢治)、『こよみ便利帳』(暦計算研究会編)、『暦と占いの科学』(永田久)、『平成十七年高島暦』